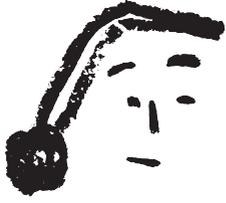


福祉の星座

「日常に漂う「個々の福祉観」

「という小さな星と星をつなげて」

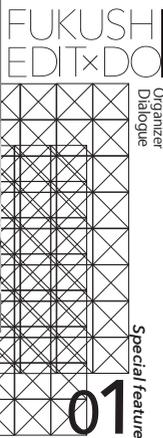


TAKE FREE

「福祉を編集する！」をふりかえる座談会

ワークショップを振り返って／主催者対談

- 久保田 翠
- 影山 裕樹
- 小松 理虔



Special feature
01

「この対談」は

2021年12月3〜5日、静岡県浜松市内で、福祉施設のPR・編集・情報発信について学ぶ合同型実践ワークショップ「福祉を編集する！」が開催されました。福祉施設従事者や編集者など総勢24名が3チームに分かれて、各チームで福祉にまつわるオリジナルLINE作成にむけたグループワークを進め、最終日には翌年春の発行にむけ、チームごとのアイデアプレゼンを行いました。主催である認定NPO法人クリエイティブサポートレッツの代表・久保田翠氏とウエチマガジン/EDIT LOCALの影山裕樹氏が、講師の小松理虔氏とともに3日間を振り返ります。

久保田 翠（クリエイティブサポートレッツ代表、以下、久保田）
小松理虔（1カルアクティビスト、以下、小松）
影山裕樹（編集者、以下、影山） ※敬称略
（文・遠藤シヨバン、協力 佐原瑞葉）

小松 もしかすると「編集が内包する福祉」のように、「編集＝福祉」といわないまでも、福祉を様々なものと結び付ける——今回でいうと、外国人労働者の問題や「きょうだい」に関する新しいアプローチなど、福祉的課題を排除せずになんとかして誌面のなかに自分のかかりしるを作っていく試みのなかで、参加者も狭義の福祉から脱却して「こんなふうに福祉って解釈できる、すごく広いものなんだな」と、体感してくれたのかもしれないね。

参加者はおそらく、狭い福祉を思い描きながらワークショップへ来たはずで、その状態から、編集と福祉の拡張性を味わうことができたのだから、参加者にとっても、レッツのスタッフにとっても、すごくいい「場」になったのではないかと、お二人の話を聞いて再確認しました。

「関係の編集」が新しい出会いにつながる

影山 僕もこのワークショップが終わってから3ヶ月を振り返ると、あらためて「編集とはなにか？」というのを非常に考えました。今回のワークショップにも福祉施設で働く方々が参加されましたが、レッツと同じ立場にあたる福祉施設側のニーズとしては、情報発信の方法などいわゆる「広報・PR寄りの編集」がある印象でした。ですが僕は、編集はけて広報に留まらず、人々を繋ぎ合わせる役割がある気がしています。

これまでならば情報は、マスメディアで大々的に広報すれば大衆に届きましたが、情報源が多様化した現在の現在、特定のコミュニティへ情報を狙って届けるために様々なコミュニケーションの回路を作る必要がある。だからワークショップでは「広報的な編集」ではなく、もっと違う「関係の編集」に取り組んでみたかった、というところがすごくありました。コミュニケーションの回路としてのメディアが、異なる人々や異なるセクターの人たちをつなげていくことが今後さらに重要になると思います。

Bチームならば、「きょうだい」に関する発想の広がり、Cチームならば、外国人コミュニティとレッツ利用者が一緒になった風景、それらがまさに違うユーザー同士をつなげるものとして機能すれば、実際にそういう人たちが出会える機会が増やせるのではないのでしょうか。

「福祉と編集が広がりをみせた3日間」

影山 「福祉を編集する！」を振り返る座談会ということで、ワークショップから3ヶ月が経ちましたが、お二人の率直な意見をうかがえると嬉しいですね。いかがでしたか。

「福祉をつたえひらく困難こそが貴重な経験」

小松 参加者の皆さん、やはり大変だったんだろうな。ワークショップに講師として3日間同席して皆さんの議論を見るに、「福祉を編集する！」というタイトルにポジティブなものを感じて参加された方々が、議論すればするほど、福祉というテーマをつたえひらくことの難しさを痛感しながらの、たうちまわって悩んでいた。でも実は、そういうプロセスこそが重要だったのではないかと僕は思っています。

「レッツとは異なる視点から福祉の姿を再発見」

久保田 福祉って、現場の中で日々過ごしているだけではあまり変化が起きないものなんですね。福祉の現場の外からやってきた受講生の姿をそばで見ている、実は自分たちにとっても、福祉がものすごく身近なものだったんだと、逆にこちらが気付かせてもらいました。



ワークショップでは「福祉」といって、レッツが日々取り組んでいる方向性とはまったく違う視座が持ち込まれていました。浜松に多い外国人労働者の存在を、飲食店に置く箸袋型のマガジンを通じて広く知ってもらおうとする案もそうでした。福祉をタネにメディアとして広がっていくという様子を見て、「ああ、そういうこともできるんだな」と発見がありました。

「福祉によって広がった編集の感覚」

小松 影山さん、今回「福祉」というキーワードで関わったことによつて、編集を仕事にする僕たちも、編集の概念が拡張された感覚がありますよね。

影山 ありますね。

小松 編集という概念が、福祉というある種の拡張性ある言葉に触れることで、僕らだけでなく参加者も、個々に持っていた編集のイメージを拡張できたのではないのでしょうか。既存の福祉のイメージから飛び出して、さらに広く柔軟に、たとえばまちづくりやローカルの実践のなかで捉えられるようになった。そうすることで、僕自身も福祉の大事なところにアクセスできるようになった感覚があります。結果として「福祉を編集する！」というコンセプトで、非常によかったですね。

ワークショップには編集者、アート関係者、福祉関係者、様々な人が参加していました。各自が悩みながら、各々の専門分野から一歩外に出て、皆で頭を付き合わせながら「人として根源的に大事なことってなんだろう」と一緒に考えた。そこが今回のよかつた点で、福祉には異なる分野で活動する人々の考え方を拡張させる性質があると感じました。

「広報的な編集から、関係性の編集へ」



☒ 広報的な編集が機能しない場所

影山 もちろん、広報・PRも重要なコミュニケーションの手段だと思います。たとえば『ただ、ここにいる人たち』のように、書籍として小松さんの視点でレッツの滞在記を出すことで、より多くの人に知ってもらえたことも、ひとつの強力なコミュニケーションの方法であることには変わりはないんです。

そしておそらく、僕ら職業編集者はそれしかできないんです。記事のタイトルや見出しを惹きのあるものにしたたり、デザインを頑張ったり……。だけど、そうした「マスに対する一方的な広報的な編集」の手つきは、レッツのような場所だと、機能不全になってしまつて役に立たないのでは、と思う瞬間が僕自身にあつたりして。

それは非常に深い命題で、編集者である僕らも、そうではない新しい回路の作り方を見つけていかなくちゃいけない、とあらためて考えさせられた気がしています。

☒ 整理しながら一緒に考えていくことで

小松 たしかに。久保田さん、今回のワークショップ開催の動機のひとつに、これまでと違ったセクションの人たちと関わりを増やしたいということがあつたと思うんですが、あらためてレッツがワークショップなどで外部の人たちとつながりを持つようとしているのは、ここ数年の変化なんですか？

☒ 福祉が持つ価値を考え直す場へ

久保田 これまでは、活動をなんらかの成果や収益へ結びつける価値観に対して疑問を抱いていましたが、ここ最近はお付き合いする人たちから影響を受けつつ「福祉は社会貢献にもなるし、金にもなる」という軸が持てるのではないかと思うようになってきました。

だから今回のワークショップのように、成果を求めるストイックな雰囲気は私たちに馴染みがなかったですが、ビジネスコンクールなどに見られるようなひとつのフォーマットに手を加えて福祉版にすることで、「福祉を活用した何かをしてみたい」と思う人材が集まるようになるのでは、と考えています。

レッツで開催している「タイムトラベル100時間ツアー」という観光企画は、参加者からお金を落としてもらうことを目的としています。現在の社会ではまだまだ稀有な場所であるレッツに来ることで、新しく得られるものが沢山あるはず、という動機で行っています。私たちには収益化のノウハウがないから、今はここまでだけで、もしかしてこの体験は、誰かのアイデアを足すことで、お金にも替えることができるかもしれない。



AFTER TALK AFTER

福祉を編集する

久保田 昔から色んな人と接したいとは思っていましたが、そのなかでもとくに、いわゆる「普通の人」と接する機会が意外となくて。レッツの企画には「障害」や「アート」というテーマが含まれるからか、参加者にはやっぱり尖がった人や面白い人が圧倒的に多くて、「普通の人」との出会いがますます遠ざかっていくという(笑)。

それに、皆にわかりやすく、万人にウケるプログラムを組むことが苦手なんです。最近はずっと時代が変わってきて、以前よりもレッツの発信に耳を傾け始めてくれる人が増えましたが、やはりそれでもレッツは編集するのが得意ではないと感じています。

影山さんや小松さんが手掛けるように整理していくことができないんです。何が必要で、何をそぎ落としていいのかわからない。全てを見せたくないつちゃうもんだから、ますますわかりにくくなっていく。それがアートのにはすごく面白いんだけど、一般的には理解されにくい要因になってしまふ。

小松 久保田さんと同じような地域の担い手の方々も、自分の情報を整理して発信するなんてことはおそらく不得意なはず。現在の編集者像は、影山さんが言ったように「会社としてのブランドイメージを拡散したり、さらにある種の資本主義的なルートに乗って社会に出すもの」だと思われているかもしれませんが、もともと散らかっているものをちゃんと交通整理して関連づけることを、現場の人と一緒にその場で考えていく。そこがまさに、編集者の役割なんだと思います。

そういう意味でも今回のワークショップはリモートでは成立しなかったと思います。レッツを自分の目で見て、皆で考えて、現場の力に触れて……。そうして入っていくことで初めて、整理や関連付けが、つまり編集ができるようになる。今回のワークショップで参加者の様子を見ながら、編集者の役割とは何か、より一層考えました。

久保田 今回のワークショップを改良して、そのための解決策を皆で議論してみることで、また新しい展開が生まれるかもしれない。そこまで「福祉を編集する！」を育てられれば、面白いなと思います。

そうしたイベントに参加するような積極的な提案を持つ人たちと、福祉の現場の人たちがコンタクトをとると思わぬ効果生まれて、「福祉の新しい使い方」が見えてくるのではないのでしょうか。実際、ワークショップ参加者のなかには、レッツでアルバイトを始めた大学生や、レッツが運営するシェアハウスの入居者から、レッツを支えるヘルパーとして働き始めた人もいますから。

☒ 異分野との出会いが福祉の編集力を引き出す

影山 今回のように編集者が入ることで、そこにハレーションはありつつも、レッツとは違った角度のアイデアが出てきましたよね。

久保田 異なる分野の人との出会いは大切ですね。福祉は携わる人に同族性があるから変化が少なく、福祉だけだと展開が面白くならない。なおかつ一般的な福祉施設の場合は、職員がキャリアを積み上げていく必要があつて余裕がないからなおのこと、そこから発想が生まれません。だから、そこを接続するような事業が立ち上がっていけば、広がりも収益性も見込めるのではないのでしょうか。

「福祉を編集する」をふりかえる座談会

NEXT PAGE >

続く

FUKUSHI
EDIT×DO

小松 まったく関係ない人同士を橋渡しすることも編集の重要な仕事である、ものすごく感じますね。逆にいうと、福祉の懐の深さとも言い換えられる。福祉を掲げるとその場が、様々な人たちが関わられる入れ物になるということだと思えます。福祉が持つ編集力、別々のものを結び付けてしまう力が働いていると思います。福祉に日頃関わっている人も、そうした大きな意味での福祉を、日々の支援のなかで往々にして忘れてしまいがちだから、福祉の内側の人も考え直すことができたワークショップだったのかもしれない。

影山 ワークショップ終了後、福祉関係者の参加者からは「広報誌をきちんと戦略立てて作ったこともなかったからすごい新鮮だった」という意見が、編集畑の参加者からは「レッツに滞在して様々なことを感じた」という意見が上がっていました。普段出会うことの少ない人たちが互いに接する機会となったのは、よかったですね。久保田 外部の人とつながると発想が新しくなりませんか、私もとても楽になりました。次回はもう少しプログラムを練って、実施期間が長い有料版でもいいと思います。「福祉を編集する！」の胃口を広げて、ITや不動産などの関係者も巻き込みながら一緒に事業立上を本格的に目指すというプログラムも、いいかもしれません。

☒ 事業やプロジェクトのなかで福祉を解き放つ

小松 どんなフィールドにも持っていきけるんですよ、福祉って参加者がレッツで過ごす時間もポイントになると思いました。今回のワークショップのように短時間で作り上げることも重要ですが、それだとどこか経済的な合理性や効率はどうしても優先されてしまう印象があります。題材となるレッツという場所は「かたちないもの」を創りだそうとしているのに、参加者は短時間で何かを生み出すことが求められる。そうしたジレンマを抱えて多くの参加者が悩んでいたのではないのでしょうか。

なので、いつけん非効率に見えるけど、レッツという場を通じて、長期間一緒に事業化も絡めて考えていくことが、結果として教育機関的な役割を帯びたり、学習プログラムへ繋がっていくと思います。

事業というよりもプロジェクト化に近い感覚ですね。たとえば、1年間に渡ってレッツに関わりつつけて、自分のある種の当事者性や自分の持っているスキルを通じてプロジェクト化していく。その人が編集者なら冊子や本を作ればいいし、それはイベント企画でも、商品でも、サービスでも、アプリでもいい。レッツで時間を過ごし、レッツのメンバーと一緒に散歩したり、スタッフと会話したり、3階のシェアハウスで一緒に何かを企画してみたり。越境して関わるなかで感じたこと考えたこと、つまり「我がこと」化されたプロジェクトを創り出していく。そうしたロングスパンの「福祉を編集する！」ができれば。そして、そういう意味では同じような方法で『ただ、そこにいる人たち』を刊行した僕が一期生にあたりますね。

久保田 皆で収益化のためのアイデアを議論して協力しながら実行に移していくことで、社会が良くなりながらも、きちんとカネにもなる。それが本当の福祉なんだと思います。

今回のワークショップを終えてあらためて、そのためには私たちのような、アートや福祉に携わる人たちだけじゃなく、様々な領域の人たち、たとえば利益を追求するビジネスの領域で活動する人々にも、理念を共有して対話することで可能性が広がっていくのではないかと、非常に考えました。

「福祉を編集する」って、最初は意味がわからなかったけど、あとから考えたなら、もしかしてそういうことを目指そうとしていたのかなという気もして。なかなか秀逸なプログラムだと思います。



「福祉を編集する！」をふりかえる座談会

ようこそ、「福祉」の宇宙へ

たけし文化センターを中心とする浜松の街で行われたワークショップ「福祉を編集する！」。

ワークショップ終了後、参加者のモヤモヤした胸中をひらいたところ、様々な意見が飛び出しました。

福祉ってなんだ。誰のためにあるんだ。結局、福祉を編集するということは、どうということなんだ――。

3日間ものあいだ私達メンバーの頭のなかを占拠しつづけた、広大すぎる「福祉」の二文字。

ひらくことの困難さから目を背けず凝視し続けた9名の意見をつなぎあわせたら、福祉の星座の輪郭が見えてきそうじゃありませんか？

福祉のイメージを集めると

Q)福祉にはどんなイメージがあると思いますか？

・貧しい人や困っている人が必要とするもの。セーフティネット。

・福祉というと、老人ホームや介護など高齢者福祉を一番に思い浮かべる人が多い

気がする。高齢化社会のためか高齢者福祉への理解や認知は高いが、障害者福祉

や生活保護は当事者や当事者が近くにいる人でないと関わる機会がなく認知さ

れにくい分野だと感じる。

また児童福祉は福祉分野としてイメージされにくく、保育園が児童福祉法に基

づいた施設であるとか知らない人もいるのではないだろうか。わたしもかつて、福

祉は「3K職」「年齢や学力的に他に仕事のない人がやること」「大変なことしかな

いこと」なやひどい偏見を持っていた。

他にも福祉に抱くイメージといえば、職員はおそろいのポロシャツを着る優しくな

いとイケない、とある福祉施設職員の方が利用者のことを「仲間と呼ぶのを聞い

て「わざとらしくていやだ」と思った。なんだか面白くなさそう。そう思っていた。

ま福祉の仕事をしているといつて「えらいね、大変でしょ」と言われることがあ

る。「えらくないよ、大変だけど楽しいよ」と返すことに「えらいね」と言われる。

・マイナスイメージだけど偽善や上から目線な感じがします。

・みずから学んで対象であることを確認しないと利用できないもの、手続きが煩雑

もしかして福祉ってみんなのものかもしれない

Q ワークショップに参加する前と後で、考えに変化はありましたか？

・福祉を身近に感じるようになった。個人的に苦しんだ体験の直後にワークショップがあったので、色々な方と体験した内容や辛さを共有して、はじめて客観視できた。そして自分が苦しみの渦中にいるときは、福祉の中にも含まれる色々な制度を利用しようとは思いつかなかったことに気付かされた。自分も、いやすべての人が福祉の中にいるはずなのに……。そうであってほしい、それが社会通念になったらしいなと思う。

Q 福祉に頼ることをためらう人にできることは？

・頼ることをためらわない状況を作る必要がある。生活保護を受けるのは恥ずかしい、生活保護を受ける人は怠け者といったイメージを変えること。でも、現時点ではその前に、他人に知られずに使つことができる状態にするべき。

・話を聴くこと

・まずなぜためらうのかを聞く。「みんな福祉の何かしらは利用するものだし、使えるものを使えばいいと思うけどな、わたしも使うことあるし、みんな使つていいから。」と伝える。

・そもそも、参加前は福祉に対して明確なイメージはなかった。生活保護や障害者施設など、具体的な例は思い浮かぶけど、じゃあ福祉とは何なのかと訊かれると分からなかった。参加して、そもそも福祉とは何なのだろうと考えて、助けるべき相手、対象を決め、その人達の利益となるように動いたり、制度を整えること、という答えになった。

・医療と福祉につながる良さを伝えること
・自分の身近な人であれば、声を掛ける。自分の周りから考えてみるのかなど。
・義務教育で、もう少しライトに教わることでできて、身近に感じられたら……。もし困ったことがあったら、人に迷惑をかけてしまつかもしれない……。って諦めずに人に頼ったり制度に頼ったりする、しやすいような環境づくりをする。

福祉を伝えようとする、そのときに

Q) 福祉をコンテンツとして落とし込もうとするなかで、どんなことを考えましたか。

・人によって福祉の視点が変わるということ

・相手に自分の考えを理解してもらおう、相手の考えを理解するには言葉が必要。でも理解してもらおう、理解するための言葉を使うのは難しい。限られた時間で計画を立て、期限内に納得のいく形になるよう、8人もの人間の考えをまとめるのは難しい。

Q) たけし文化センターという「表現未満」な空間で感じたことは？

※NPO法人クリエイティブサポートレッツでは、誰でももっている自分を表す方法や、本人が大切にしていることを、取るに足らないこと一方向的に判断しないで、その行為こそが文化創造の軸であるという考え方を「表現未満」と呼んでいます。

・みんな自由！自由によれるのもすごいし、他人の自由を受け入れるのも実はすごいことなんだなあ」と入社当初思った。例えば、大きな声で「トーン！（文字で表現できない発音）」と言ったり、一日中太鼓を叩いていたり、頭のことを「ぶくらはぎ」と言ったり。最初はその空間に全然なじめず、面白いと思いつつも居心地は正直とても悪かった。けどだんだん慣れてきてしまった！いけない！

・本で読むのと見るのでは全然違っていた。本を読んでいる時にはアートプロジェクト色がとても強いのかと思っていたが、実際に見ると立派な福祉法人であつたことになりにギャップを感じた。

・なかなか結論かでない会議そのものに、「福祉」の側面があると感じた。みんなが少しずつ折り合いをつけて、すべての人間が完全に快い状態であることではないが誰かを否定する権利を持ち合わせない。その状態で議論を進めていくことはすごくエネルギーがいる。同時に、議論を個人的な被害妄想に結び付けないために、自分自身の自尊心の健全なバランスや、相手の身になろうとしすぎないことが、福祉に身を置くうえでの資質として求められると思った。

・ありのままが「表現未満」として受け入れられるレッツという空間で、なにか「ネタ」はないかと編集の目線で切り込まなくてはいけないときに抱く居心地の悪さ。あの空間を日々作っているスタッフと利用者の皆さんも、そういうものを持ち込まれて「ネタ」として消費されそつになる。居心地の悪さを感じつつも、新しい視点を受け入れることを大切にするために、私達を尊重してくれていたと思う。

・お派手ように「魅せよう」と利用するやり方は好きではないが、すべての人がもつ潜在的な創造性が自然に見えるような社会がいいなと思っているので、福祉の中の表現活動でそのようなものが見られると、嬉しい。人間は、本来創造的なことが好きな生き物なのではないか？と思っているので、潜在的な創造欲求が疼く人も一定数いるのではないかと思っている。

Q) 今の自分が障害のある人とどんなふうに関われると思いますか？

・難しい。例えば、手動車椅子の人が坂を登っていたら手伝うし、視覚障害の人が迷っていたら手を貸すと思う。これらは相手がやってほしいだろうこと、相手の助けになることが分かるから行える。でも、相手の望みも、不快なことも分からないように接すればいいのかわからない場合には関われない。

Q) 結局「福祉を編集する！」とは、現時点でどう思うんですか？

・福祉を「福祉」という言葉を使わないで表現すること
・今回は「福祉を編集する！」というイベントタイトルで、たとえば「建築」や「IT」とかと並列な意味合いでの「福祉」という言葉に、取り囲まれている感じがした。それをレッツでは「表現未満」と表しているとも思う。「福祉」じゃない、もっと他の言い表し方で、「福祉」にまとめすぎずに、それ以外の表現や言葉の言い回しで伝えられたらいいのかなって思う。
・障害を知り、人の本質を知ること。他人を通して自分を知ること。
・福祉を編集することとは、世の中に弱さを持った人もいることを認知させ、尚且つ当事者意識を持たせるように伝えることなのかと思います。

この文章を読んでいる、あなたにも

Q) あなたにとって「当たり前」とはなんですか？

・朝起きて夜寝て、美味しいものを食べること
・こうでない人に批難されてしまつたなどの、個人的なコンプレックスや業がうまくいってほしい。他者との互助を遠ざけるもの

これは相手が健常者でも同じだけど、相手のことが分からない状態ではどうやって関わればいいのか分からない。「障害のある人」だけだと、抽象的過ぎる。

・関わってトラブルになったらという恐れが強い

・仕事としてやっているので支援者として。でも本当は「友だち」というとフランクすぎるけれど対等な、横の立場で関わりたい

ワークショップに参加し思ったのは、自分も含めて世の中が、どこか福祉に関して身近にあるはずなのに、第三者的視点で他人事の様に見ていると感じました。マイノリティとして扱われることも多く、本当は身近にあるはずなのに、どこか遠くの出来事のように、福祉の情報やニュースを受け取っている。そういった人は非常に多いのではないのでしょうか。そういった人たちに福祉を伝えるために編集し、世の中に伝え、届ける、即ち編集するという行為が必要なのだと感じました。そして伝えることで、当事者意識を持たせ、その誰かが周りに伝え、連鎖し広がり、共に生きる社会、共生社会を作っていくきっかけになる。福祉を編集することにより、世の中を変えられるきっかけができるのではないかと私は考えています。

・決まりごと、社会的制約

・社会や両親などから学んで身につけた観念、思い込み。自分の目の前に、「ありえない！」って思っようなことをする人が現れてはじめて気づくもの。環境によって変わる。

・自分が学んで獲得したいもの

あなたにとって、福祉とは、
誰のためのものでしょうか。

この冊子の名は「福祉の星座」といいます。
広すぎる「福祉」というテーマに対して、
個々の福祉観を「星」に見立てて、
冊子のなかに並べ、結び合わせていくことで、
星座のように福祉の姿が見えてくるかもしれない。

「福祉を編集する！」というワークショップに参加した私たちが
抱いた素朴な疑問が、この冊子にはこめられています。

これを読んでいるあなたも、
ぜひ自分のなかの「福祉観」を並べて
星座を結んでみてください。



NPO 法人クリエイティブサポートレッツの
WEB メディア「表現未満、」マガジンでも、
同テーマについて扱ったコラムをご覧ください。



福祉の星座

2022年4月23日発行

限定300部

発行：遠藤ジョバンニ 植森侑子 佐原瑞葉 菅沼厚希

福島憲太 松永恵 新月 横山るみ

編集：遠藤ジョバンニ

文字起こし（特集1）：佐原瑞葉

校正（特集2）：新月

デザイン：植森侑子 菅沼厚希 松永恵



Special Thanks：小泉文 杉田可縫 ムラキング

協力：認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ ×EDIT LOCAL

「福祉を編集する！」

福祉施設のPR・編集・情報発信について学ぶ合宿型実践ワークショップ

お問い合わせ

<https://forms.gle/gvL71KBbocmrwzf88>

